土、水、植物

—カズオ・イシグロ『忘れられた巨人』の舞台設定から見る忘却の功罪—

福　原　俊　平

1．序論

カズオ・イシグロ（Kazuo Ishiguro）の作品において、記憶は一貫して大きなテーマである。イシグロが好んで使う「信頼できない語り手」の技法では、その信頼不能性の多くは、語り手の記憶の危うさに由来している。トラウマ的な過去がもたらす罪悪感や喪失感が、ナルシシズムや自己肯定と入り混じり、記憶は時に都合よく忘却され、改竄される。さらに、イシグロ小説には歴史のトラウマがつきまとっている。日本を舞台とした作品における太平洋戦争、『日の名残り』（*The Remains of the Day*）におけるナチズム、『わたしたちが孤児だったころ』（*When We Were Orphans*）における日中戦争、『充たされざる者』（*The Unconsoled*）における共産主義体制の崩壊というように、イシグロ作品は歴史の傷跡が残る場所がしばしば舞台となっている。そのため、社会体制の大きな変化によって生じる共同体のトラウマ的記憶も、イシグロ作品の大きなテーマである。

本稿で論じる『忘れられた巨人』（*The Buried Giant*）は、個人と共同体の記憶という、イシグロがこれまでも取り上げてきたテーマを、より前景化させた形で扱った作品であると言える。クエリグ（Querig）という竜が吐き出す霧によって人々の記憶が失われる古代ブリテン島を舞台として、老夫婦の愛憎の過去という個人のレベルと、ブリトン人によるサクソン人の虐殺という集団のレベルにおいて、トラウマ的な記憶を忘却することの是非が問われている。この二つのレベルの併置は、イシグロが長く温めてきたテーマである。イシグロは2005年のインタビューにおいて、“I think my books have concentrated on countries going through big social changes on the one hand, or individual memories on the other hand, but I've never been able to put these two things together. It is quite a challenge”（*Spiegel Online*）と述べているように、長らく執筆したいと考えながらも、その困難さから実現できなかった主題が、ついに『忘れられた巨人』において実を結んだと言える。

本論では、このような主題を描くにあたって、イシグロが選択し、構築した舞台設定の意味について考察する。イシグロは、“I've always had a problem with setting, all through my career”（*Telegraph*）と、小説の舞台設定には常々苦労していると明かしている。そして、作品を完成させるまでの流れとしては、最初に扱いたいテーマがあり、最後の段階で、歴史書も含めて、ロケーションハンティングを行うとしている（*Spiegel Online*）。実際、TV Ontario の *The Agenda with Steve Paikin* におけるインタビューで明かしているように、『忘れられた巨人』においても、舞台設定には頭を悩ませており、当初は現代の国を舞台にすることも考えたという。しかし、最終的には、太古のブリテン島を舞台として完成することになった。

この舞台設定には二つの面がある。ブリテン島が舞台であるため、現代の英国と結びつくアクチュアリティを有する一方、寓意に満ちたファンタジー的世界を描いているため、普遍性を志向するものとなっている。伊藤盡のことばを借りると、「イシグロは現代のイングランドに直接リンクしながらも現在の政治に直結しない普遍性を求め、アーサーの名前が文献に現れるか現れないかの端境の時代を舞台として選んだ」（209-210）。本論では、舞台設定の現代性と普遍性に注目し、それぞれの次元において、忘却の功罪というテーマに対して、舞台設定がどのような効果をもたらしているのかを分析していきたい。そして、イシグロは明確な結論を留保しているものの、舞台設定からは忘却による和解の可能性を強く示唆していると論じる。

2．忘却の倫理性

舞台設定の分析に入る前に、『忘れられた巨人』における記憶と忘却の問題を概観したい。この小説において特徴的なのは、記憶というイシグロの一貫したテーマを扱いながらも、忘却に従来よりも重点が置かれ、さらに、その倫理的な面が探求されていることである。ブリトン人によるサクソン人の虐殺という大事件があったものの、クエリグの呼きだす霧によって、人々は集団的な忘却状態にあるが、そこにウィスタン（Wistan）がサクソン人の強い憎しみをもって登場し、クエリグを退治す

ることによって、忘れられた虐殺の記憶をよみがえらせる。その結果、虐殺の記憶という「埋められた巨人」が土中から掘り起こされ、サクソン人によるブリトン人に対する大規模な復讐が始まろうとする。そのため、この小説においては、倫理的な問いが登場人物だけではなく、読者にも繰り返し投げかけられる。過去の巨悪を忘却し、目を背けることで得られる平和を疑問視する倫理観と、忘却し、なかったことにしてしまう方が良い記憶もあるという現実主義が衝突する。

このような忘却の取り上げ方は、フリードリヒ・ニーチェの『反時代的考察』における問題意識と共通するところがある。19世紀的な歴史主義の蔓延に対して、ニーチェは「生に対する歴史の利害」という章で、歴史を重荷や病としてとらえた。歴史主義の対極にあるものとして、牧草を反芻する家畜の非歴史性を挙げ、反芻動物は、忘却により過去から解放され、常に現在を生きるとされた。「非歴史的なものと歴史的なものとは個人や民族や文化の健康にとって同じように必要である」（127）とあるように、個人だけではなく、集団にとっても、記憶の重荷が悪影響を及ぼしうるという意識が見られる。これはまさにイシグロが『忘れられた巨人』において問いかけている問題である。2005年の段階で、イシグロは“What I would like to tackle next is how a whole society or nation remembers or forgets. When is it healthy to remember, and when is it healthy to forget?”（*Spiegel Online*）と述べている。イシグロは以前から、社会や国にとっては、記憶は重要である一方、忘却する方が健全な場合もあるのではないかという問題意識を持っていた。そして、その問題意識がついに『忘れられた巨人』で明確な形をとったことになる。

記憶と忘却に関する倫理的な問題意識は、戦後作家としてのイシグロの側面にも由来している。[1]第二次世界大戦やホロコーストのトラウマとどのように向き合うかということは、戦後作家の非常に大きな課題である。イシグロ自身は第二次世界大戦を経験していないが、彼の親の世代は経験している。そのため、Yugin Teo が指摘するように、戦争を記憶することは彼の世代の責務だと感じており、歴史のトラウマを背景とした小説を多く書いている（48）。記憶する責任を感じているからこそ、記憶と忘却という問題は、一種のジレンマに陥る。ノーベル文学賞受賞記念講演では、両親が世界大戦を経験した世代であることやアウシュビッツ＝ビルケナウ強制収容所を訪れた自身の経験に言及しながら、イシグロは過去の悲劇を記憶することのジレンマについて語る。

> Are there times when forgetting is the only way to stop cycles of violence, or to stop a society disintegrating into chaos or war? On the other hand, can stable, free nations really be built on foundations of wilful amnesia and frustrated justice? (25)

忘却によって、復讐の連鎖という負のサイクルを断ち切ることができるのではないかという可能性を提示する一方、そのような記憶喪失は正義（justice）を欠いているため、真に安定した、自由な国家を築くことはできないのではないかという疑問も提示する。イシグロは『忘れられた巨人』において、このようなジレンマを文学作品として提示していると言える。

このようなイシグロの問題意識は、現代思想の領域におけるホロコーストなどのトラウマ的過去についての総括的研究と非常に接近している。人文科学における記憶のテーマを探求した記念碑的作品である Paul Ricœur の *Memory, History, Forgetting* において、リクールが最終章で提示する問題が、まさにこの忘却の効用である。この大著は、幸福な記憶があるように、幸福な忘却は存在するのか、あるいは、記憶術と同じく「忘却術」があるべきなのかという問題を提起して締めくくられている。また、忘却の効用とその倫理の問題については、Jacques Derrida も *On Cosmopolitanism and Forgiveness* で論じている。リクールとデリダは見解が異なる点があるものの、Anne Whitehead によると、“both thinkers struggle with the uncomfortable but necessary distinctions between forgetting without amnesia, and forgiving without erasing memory”（156）とあるように、問題意識には重要な共通点が見られる。言葉遊びのようになるが、forgetting による forgiving、amnesia による amnesty というデリダの問題意識は、まさに『忘れられた巨人』で描かれている問題であるだろう。そのため、柴田元幸が述べているように、この小説は「大昔が舞台でありながら「集団の記憶の忘却」という最も現代的な問題を扱っている」（32）ことになる。

3．舞台設定のアクチュアリティ

ここまで見てきたように、『忘れられた巨人』には記憶と忘却をめぐる倫理的な問題意識があるが、そのような主題の受け皿となる舞台は古代のブリテン島である。前述したように、この舞台設定には、主に二つの効果がある。一方では、古代ブリテン島が舞台であるため、現代のイギリスとの連続性がある。他方では、ファンタジー的な世界が描かれているため、特定の時代と場所に縛られない普遍的なメッセージ性を志向している。本節で

[1] 戦後作家としてのイシグロの側面については、Groes and Lewis が同世代の英国作家たちと比較し、人々を癒し団結させるような反応を得ている点にイシグロの特徴を見出している。

は、前者の側面に焦点を当て、舞台設定の効果について考察したい。

『忘れられた巨人』の背景には、現代の政治的状況への大きな危機感がある。戦後作家としてのイシグロの側面については先ほど触れたが、Lucy Scholes が指摘するように、この作品の原点には、第二次世界大戦に加えて、アパルトヘイト後の南アフリカ、ルワンダやユーゴスラビアにおける虐殺など、現代史において繰り返される悲劇がある。まず、第二次世界大戦に関しては、イシグロは NHK の『白熱教室』において、『忘れられた巨人』の主題を説明するため、日本やフランスにおける大戦のトラウマとの向き合い方を紹介している。例えば、大戦中のヴィシー体制下のフランスでは、ナチスに協力したフランス人が少なからずいたが、戦後のフランスでは、レジスタンスの神話によって、不名誉な過去を国民全体として「忘却」したとイシグロは述べている。イシグロによると、フランス国民が皆、勇敢なレジスタンスであったという神話によって、内部対立の不都合な過去を覆い隠すことで、フランス国民を戦後復興に向け団結させる効果があった。

他方で、忘却は万能ではないこともイシグロは認識している。ユーゴスラビア紛争やルワンダにおける虐殺を例に挙げ、忘れられたはずの記憶が呼び起こされる時、大きな暴力性が伴うことを指摘している。石黒千賀子によるインタビューでは、「ユーゴでの戦争勃発には、大変なショックを受けました。何より私にとって衝撃だったのは、社会の記憶とは時としていかに暴力的になり得るか、という事実でした。」と述べ、平和に共存しているように見える複数の民族でも、ひとたび過去の悲劇の記憶が呼び起こされると、突如として激しい憎悪が噴出すると指摘している。

イシグロの危機感をさらに強めるのは、これらの惨事は過去の、外国の出来事ではなく、イシグロが暮らす現在のイギリスにも関係する問題だということである。昨今のイシグロの言動から見えるのは、世界的なポピュリズムの隆盛とリベラリズムの衰退に対する危惧である。ノーベル文学賞受賞記念講演において、イシグロは次のように述べている。

> 2016, a year of surprising – and for me depressing – political events in Europe and in America, and of sickening acts of terrorism all around the globe, forced me to acknowledge that the unstoppable advance of liberal-humanist values I'd taken for granted since childhood may have been an illusion (31-32).

イシグロは世界で連鎖するテロリズムだけではなく、2016年の欧米における政治的な出来事、すなわち、ドナルド・トランプの米国大統領就任とイギリスの EU 離脱を問う国民投票（Brexit）に衝撃を受けたと述べている。リベラルな価値観をもつイシグロは、社会の土台が揺らいでいることに対して、危機意識を持っているのである。

EU 離脱を支持する国民投票の結果は、移民に対するイギリス国民の排外感情の高まりの証左である。イシグロは国民投票の直後に『フィナンシャル・タイムズ』にて強い怒りを表明し、日本生まれという出自を踏まえながら、移民への不寛容と人種差別に警鐘を鳴らした（富士川 45）。人種差別の問題は、ノーベル賞受賞講演でも触れているのだが、その表現法は大きな注目に値する。なぜなら、"Racism, in its traditional forms and in its modernised, better-marketed versions, is once again on the rise, stirring beneath our civilised streets like a buried monster awakening"（33）とあるように、人種差別を"a buried monster awakening"と述べているからである。明らかに、この表現は『忘れられた巨人』の原題 *The Buried Giant* と呼応している。Leyla Sanai も指摘するように、この小説のタイトルが象徴するのは、"the repression of hatreds, resentments and the desire for violent redress"である。抑え込まれてきた憎悪感情が、ポピュリズムという形で噴出しようとしていることに、イシグロは警鐘を鳴らしていると言える。

イシグロがイギリスの現状に危機感を覚えていることを踏まえると、舞台設定がブリテン島であるという事実はますます重要になる。どれだけ時代が離れており、竜やオーガの登場し、アーサー王伝説に彩られた世界であろうとも、そこで描かれるブリトン人とサクソン人の争いは、イギリスという国家の土台となった出来事である。事実、この小説では、歴史的事実もある程度踏まえられており、伊藤が指摘するように、490年頃のベイドン山腹での戦いという、ブリトン人によるサクソン人の大量殺戮という史実が透けて見える（205-207）。もちろん、このような舞台設定において、イシグロは描くのは、現代の英国とはかけ離れたファンタジー的な世界である。しかし、現代の英国との連続性を示唆する表現が、ところどころに仕掛けられている。まずは、冒頭の地勢描写を見てみたい。

> You would have searched a long time for the sort of winding lane or tranquil meadow for which England later became celebrated. There were instead miles of desolate, uncultivated land; here and there rough-hewn paths over craggy hills or bleak moorland. Most of the roads left by the Romans would by then have become broken or overgrown, often fading into wilderness (3).

太古のブリテン島の荒んだ自然を表現しているが、そこでイングリッシュネスの象徴である緑豊かな風景が言及されている。ただし、いわゆる英国的な風景はまだ誕生しておらず、その不在をあえて指摘することによって、イシグロは後に誕生するイングリッシュネスについて、予言的に言及していることになる。そうすることによって、このファンタジー的世界と現在の英国との連続性が示唆されているのである。

また、この冒頭の場面では、語り手は続けて読者への呼びかけを行う。この作品で描かれるブリテン島がまだ文明的に発達していないことについて読者に弁解するのである。同時代の他国では優れた文明をもっていた地域もあったが、ブリテン島は鉄器時代よりわずかに進んだ程度の文明しかない。

> I have no wish to give the impression that this was all there was to the Britain of those days; that at a time when magnificent civilisations flourished elsewhere in the world, we were here not much beyond the Iron Age. Had you been able to roam the countryside at will, you might well have discovered castles containing music, fine food, athletic excellence; or monasteries with inhabitants steeped in learning. But there is no getting around it. [. . .] I am sorry to paint such a picture of our country at that time, but there you are (4-5).

この場面で注目すべきなのは、“you”という代名詞で読者に呼び掛けていることである。この“you”は、一義的には、現代の英国人の読者を指しているだろう。自国の文明に誇りを持つ英国人読者を指しているからこそ、文明以前の状態にある英国を描いていることに対して、弁明しているのである。そして、この作品で描かれる世界は、現代の英国とは大きく異なっていても、あくまでも“our country”であることが確認されているのである。

現代英国との連続性についての言及は、冒頭だけではない。物語がある程度進行し、ファンタジー的な物語世界の中に読者を引き込んだ後においても、語り手は突如として現代の英国に言及する。アクセル（Axl）とウィスタンが眺めた風景について、語り手は“The view before them that morning may not have differed so greatly from one to be had from the high windows of an English country house today”（87）と述べ、今日の英国のカントリーハウスから見えるに風景になぞらえる。言うまでもなく、カントリーハウスはイングリッシュネスのアイコンである。そのため、語り手によるカントリーハウスへの言及は、太古の荒んだ風景世界に馴染んだ読者を、現代へと無理やり呼び戻し、さらにイングリッシュネスについて考えさせる働きを持っていると言える。

さらに、物語の終盤においても、語り手は読者へと呼びかける。『忘れられた巨人』は4部構成となっているが、第四部は以下のような読者への呼び掛けから始まる。

> Some of you will have fine monuments by which the living may remember the evil done to you. Some of you will have only crude wooden crosses or painted rocks, while yet others of you must remain hidden in the shadows of history. You are in any case part of an ancient procession, and so it is always possible the giant's cairn was erected to mark the site of some such tragedy long ago when young innocents were slaughtered in war. This aside, it is not easy to think of reasons for its standing. One can see why on lower ground our ancestors might have wished to commemorate a victory or a king. But why stack heavy stones to above a man's height in so high and remote a place as this?
>
> It was a question, I am sure, equally to baffle Axl as he came wearily up the mountain slope (291).

ここでは、読者に語りかけながら、語り手は巨人の石塚（the giant's cairn）の由来について考えを巡らせる。この読者への呼びかけは、あらすじの上では不可欠なものではなく、呼びかけなしに、話を進めることも可能であったであろう。そのため、Borowska-Szerszu は、この語り手による読者への呼びかけは、読者と距離を取りながらも、同時に引きつけようとするイシグロの試みの核心であると述べている（39）。しかし、イシグロは読者のどのような関心を引こうとしているのだろうか。まず、「巨人の石塚」であるため、作品のタイトルと直結し、歴史のトラウマとどのように向き合うべきかという作品の主題と関係していることは明らかである。そして、“some of you”や“others of you”などと呼びかけながら、歴史的悲劇をどのような形で記憶するのか、負の記憶がとるべき形について、読者自身が考えるように仕向ける。その上で、この物語世界における巨人の石塚の由来と存在意義について、読者に推測させる流れとなっている。そして、引用の最後では“I am sure”と、語り手の存在を明示しながら、そのような疑問こそが、アクセルがまさに抱いた疑問であると述べることで、読者とアクセルが時間を超えて、対等な場所に置かれている。語り手は、“You are in any case part of an ancient procession”とあるように、トラウマ的な過去とどのように向き合うかという重大な問題は、太古の時代から現代まで連綿と続いていると述べているのだが、語りの技巧の上でも、その連続性が強調されていると言える。

ここまで見てきたように、『忘れられた巨人』では、

ファンタジー的な物語世界の内部だけで完結するのではなく、読者が位置する現代の英国社会へとの通路が開かれている。現在との連続性が意識されているからこそ、この作品の舞台がブリテン島であるという事実は、より大きな意味を持つ。というのも、ブリトン人によるサクソン人の虐殺という負の記憶は、イギリスという国の成り立ちの根底にあるからである。そのため、デリダの次のことばは、『忘れられた巨人』における忘却の政治的問題意識と非常に近い所にある。

> All Nation-States are born and found themselves in violence. [. . .] The foundation is made *in order to* hide it; by its very essence it tends to organise amnesia under the celebration and sublimation of the grand beginnings (57)

デリダによると、すべての国民国家の誕生には暴力が伴っており、それを隠すための記憶喪失（amnesia）がつきものである。『忘れられた巨人』においては、ブリテン島における国家の成立のもとに埋められていた暴力を掘り起こした。集合的な記憶喪失は、国民国家の正当性を脅かすものではあるが、ここで重要なのは、この小説で描かれているサクソン人とブリトン人の争いは、現在の民族感情の上では、長い時間をかけてほぼ克服された過去だという点である。現代のブリテン島では、EUからの新しい移民に対する排外感情の高まりがみられる中、『忘れられた巨人』は大昔の民族紛争を題材とし、そこでの復讐心を描き出す。しかし、度重なるイングリッシュネスへの言及が示すのは、虐殺のトラウマは、長い時間をかけた忘却の果てに癒され、完全ではないとしても、イングリッシュネスという形で融和に至ったということである。この小説では、過去との向き合い方はいつの時代も大問題であることを示しながらも、現代の英国社会を忘却が機能した例として示唆することで、結果として、忘却の効用により力点が置かれていると言えるのではないだろうか。

4．土、水、植物

前節においては、舞台設定の現代性について考察したが、他方で、イシグロは作品の問題意識を特定の時代と場所に縛られたくないと明言している。例えば、TV Ontarioのインタビューでは、現代という時代設定を避けたのは、歴史の中に“recurring patterns”があることを示したかったからだと述べている。そのため、寓話的な舞台設定を採用することにより、特定のジェノサイドのみを指すことを避け、普遍的な問題として描こうとしたのである（Borowska-Szerszun 34）。

普遍性を達成するための手法としては、まずは、間テクスト性の活用が挙げられる。竜やオーガの登場する舞台設定が原型的なファンタジーであるだけではなく、イシグロは自身の物語を他の物語へと延伸していく。『忘れられた巨人』はアーサー王伝説を下敷きとしているが、その他にも、『指輪物語』（*The Lord of the Rings*）や『ベオウルフ』（*Beowulf*）との間テクスト性が指摘されている。[2]さらに、アクセルの妻がベアトリス（Beatrice）と名づけられていることが示唆するように、ダンテの『新曲』もまた主要なテクストである。これらが示すのは、この小説テクストは多層的な物語の糸によって織りなされており、他の文学テクストへと延長しているということである。

また、小説の内枠においても、様々な寓話的な要素が盛り込まれている。中でも一番重要なものは、ベアトリスが恐れる船頭の審判であろう。船頭のみが連れていくことができる不思議な島があり、そこでは他者の声は聞こえても姿は見えず、一人でさまようことになる。しかし、船頭の質問に答えて、夫婦の愛が証明されれば、二人で一緒に島へと渡ることができる。逆に、証明できなければ、片方が取り残され、夫婦は永遠に別れることになるのだという。この船頭の逸話は、何度も繰り返し、形を変えて登場する。ある時は、取り残された老女がウサギを殺して船頭をなじる場面として、あるいは、取り残された妻たちの集団がガウェイン（Gwain）を責める場面として、この逸話は変奏され、最後の章では、船頭が語り手となり、アクセルとベアトリスの愛が試される。そのため、この小説の核となる寓話であると言えるが、ここにも間テクスト性あるいは原型的物語への志向が見られる。というのも、この船頭は、Borowska-Szerszun や Michiko Kakutani が指摘するように、ギリシア神話の冥府の河の渡し守であるカローンがモデルとなっているからである。そのため、この小説の最後で、ベアトリスが一人で島へと連れられて行くことは、彼女の死を象徴的に示していることになる。なお、カローンは、ダンテの『神曲』においても登場しており、船頭のエピソードもまたダンテとの間テクスト性を補強している。

船頭の逸話の他にも、いくつもの寓話的・象徴的な逸話によって、この小説は織りなされる。例えば、竜にかまれた少年であるエドウィ（Edwin）が、暗い納屋の中で母の声を聴く場面がある。納屋の外では叫び声が聞こえ、投石が壁にぶつかる音もあり、騒然としている。そんな中、姿の見えない母の声は、エドウィンに対して次のように語る。

[2] ファンタジー小説との関係については、Hodson や Lezard を参照。

> Go round and round the wagon, because you're the mule tethered to the big wheel. Round and round, Edwin. The big wheel can only turn if you turn it, and only if you turn it can the stones keep coming. Round and round the wagon, Edwin. Go round and round and round the wagon (93).

母の声はクエリグの声であると思われるが、その声によると、エドウィンは大きな車輪に縄でつながれたラバであり、貨車をぐるぐる回り続けなければならないとされる。シンボリズムに満ちた内容であるが、エドウィンはさらに、別の寓話的エピソードへと思いをはせ、戦争により両足を失った老人ステファ（Steffa）が語る狼の話を思い出す。三匹の狼が村にやってきたとき、村人たちが納屋に隠れ、誰も抵抗しなかったために、狼たちに鶏や山羊を殺され、すべてを奪われたという話である。これらは、ブリトン人によるサクソン人の虐殺を示唆しているが、重要なのは、童話のように動物化されたキャラクターに意味が託されていることである。言い換えれば、この小説においては、物語内容が直接的に語られるのではなく、しばしば象徴的・寓意的に表現されている。

そもそも、連れ去られた竜というクエリグ自体が、非常に寓意に満ちているが、そのモチーフも変奏される。縛られた少女を連れまわす３人の少年たちという逸話もあるが、クエリグの誘拐と３人のブリトン人戦士という出来事に対応している。さらに、クエリグはエドウィンに呼び掛ける母でもある。そのため、クエリグの寓話はこの小説内で幾重にも重ねられている。それによって、物語内容は多層的になり、特定の時間と場所に縛られない、普遍性を獲得しようとしている。

さらに、このような寓話的な普遍性を補強するものとして、３という数字の頻出がある。３の数字は物語において普遍的である。キリスト教の三位一体説など神聖なものに関することもあれば、より一般的に、世界中の童話において、例えば三匹の子ブタのように、３の数字は頻出している。イシグロはこのような普遍的なパターンを踏襲しようとする。先ほど取り上げた寓話的な話において、ヤギを虐殺する狼たちは３頭である。縛られた少女を連れまわすのは、３人の少年であり、Querig を誘拐した戦士も３人である。凍った池にウィンストンが見るオーガ（実は大木であるとわかる）も３匹である。もちろん、同じ内容を指す寓話が変奏されているため、同じ数字が反復している面がある。しかし、船頭がベアトリスを連れていく不思議の島の船着き場の近くには、３つの太古の岩が連れ合いのように向かい合っているとされている。船頭は次のように語っている。

> Yet for this crossing today, I ask you to wait a while longer back on the shore. I'll see to it the good lady's comfortable on the opposite one, for I know a spot close to the boat's landing where three ancient rocks face one another like old companions. I'll leave her there well sheltered, yet with a view of the waves, and hasten back to fetch you (342).

この岩の３という数字の意味は多義的であるが、老夫婦と先に亡くなった息子を指しているのであろうか。いずれにせよ、この小説においては、意図的に３という象徴的な数字を反復的に盛り込むことで、普遍性を強調しようとしていると言えるだろう。

ここまで見てきたように、この小説は寓話的なエピソードを多層的に重ねることで構成されているが、物語世界の風景描写を見ると、土と水が強調されている。そして、土と水には象徴的な意味合いが込められている。まず、土については、*The Buried Giant* という原題が示す通り、トラウマ的過去を内包するものとされている。土には憎しみの種が埋まっている。そのため、エドラ（Edra）という女性がガウェインの助けを借りて、サクソン人の領主に復讐を果たすとき、その道具が鍬（hoe）という土を耕す道具であるということは象徴的であると言える。この小説においては、土の中に埋まっているのは、大量の亡骸である。虐殺されたサクソン人が大量に葬られた地下墓地にて、ガウェインは次のように語る。

> "We need not quarrel, Master Axl. Here are the skulls of men, I won't deny it. There an arm, there a leg, but just bones now. An old burial ground. And so it may be. I dare say, sir, our whole country is this way. A fine green valley. A pleasant copse in the springtime. Dig its soil, and not far beneath the daisies and buttercups come the dead. And I don't talk, sir, only of those who received Christian burial. Beneath our soil lie the remains of old slaughter. Horace and I, we've grown weary of it. Weary and we no longer young" (186).

ここでは、ガウェインはその地下空間が埋葬地であると認めるだけではなく、それを拡大し、ブリテン島という島自体が埋葬地であると論じている。ブリテン島全体において虐殺が行われ、その過去が全土に埋まっているとされる。そのため、その表面は"a fine green valley"や"a pleasant copse"で覆われていようとも、土を掘り返せば残酷な過去も掘り起こされることになる。ここで注意が必要なのは、土の表層を覆う植物の存在であるのだが、この点については後ほど論じたい。

このような土に対して、水は、レーテーの神話と同様

に、死と忘却を象徴する。不思議の島へと連れていく船頭が、カローンを原型としていることからも明らかなように、水を渡り、島へとたどり着くことは、死者の世界へと渡ることを意味する。『忘れられた巨人』において、イシグロは水と死を執拗に結びつけている。クエリグをとらえようとした時のことをガウェインは回想するのだが、そこでの傷ついた戦士たちの行動が非常に興味深い。ブリトン人の戦士たちは、重傷を負い死に瀕すると、水を求め、川や湖へと這って進もうとした。中でも、ガウェインが詳細に語るのは、ビュエル（Buel）とのやり取りである。瀕死のビュエルがガウェインに頼んだ最期の望みは、水辺へと連れていくことであった。

> "But this she-dragon's all but parted you in two," I tell him. "If I must carry you to water, I'll have to go under this summer sun, a separate part of you under each arm before we reach any such place." But he says to me, "My heart will welcome death only when you lay me down beside water, Gawain, where I hear its gentle lapping as my eyes close" (284).

ここで興味深いのは、ビュエルはクエリグによって、体が二つに切断されているということである。船頭が妻と夫を引き裂くように、ビュエルの身体は引き裂かれている。そして、"Yet he forgets the errand again, and talks of the sea, and of a boat he knew as a small boy when his father took him far from the shore on a kind evening."（285）とあるように、海と小舟について語ったのだという。船乗りと不思議の島の逸話で登場するモチーフを意図的に反復しており、そうすることで、水と死の結び付きを強調していると言える。

さらに、別の場面においても水は死と結び付けられるが、そこでは水の浄化する作用について語られる。アクセルとベアトリスが川を下る際、ベアトリスは小妖精（pixies）によって水中に連れ込まれそうになる。

> "A wise man like you, stranger. You've known a long time now there's no cure to save her. How will you bear it, what now lies in wait for her? Do you long for that day you watch your dearest love twist in agony and with nothing to offer but kind words for her ear? Give her to us and we'll ease her suffering, as we've done for all these others before her" (254).

ベアトリスが腹部に痛みを抱えている様子は前半から描かれているが、それは不治の病であった。小妖精はアクセルにベアトリスを差し出すように語りかけ、"We'll wash her in the river's waters, the years will fall from her"（254）と、そうすればベアトリスは苦しみから解放されると説得する。ここで重要なのは、水によって洗い流されるのは、彼女の苦しみだけではなく、"the years"という彼女が生きた歳月でもある点である。つまり、水は忘却とも関連付けられていると言える。

そもそも、クエリグが吐き出す霧も水分である。クエリグ探しの旅が終わり、クエリグの隠れ家にたどり着いたとき、クエリグは衰弱し切った姿で登場する。そこで強調されるのは、水分の枯渇である。

> As for the dragon, it was hardly clear at first she was alive. [. . .] In fact it took a moment to ascertain this was a dragon at all: she was so emaciated she looked more some worm-like reptile accustomed to water that had mistakenly come aground and was in the process of dehydrating (310).

弱り果てたクエリグには、竜としての力強さは全く感じられず、陸地に打ち上げられ、脱水症状にある水生爬虫類に喩えられる。他の場面においても、クエリグは魚や亀にも喩えられており、本来ならば水が豊かなところで活動する生物が、水分を奪われ、瀕死の状態にあるとされている。さらに、クエリグと水との結びつきはその巣穴も表れている。クエリグが身を隠す穴は、"more like a drained pond than something actually dug into the ground"（399）とあるように、掘られた穴というよりは、むしろ干上がった池のようだとされている。クエリグは霧を吐き出して人々の記憶を奪っていたが、この干からびた姿が表すのは、水がもつ忘却の力を使い果たしたてしまった状態であろう。そして、ついにその命を絶たれることによって、ブリテン島全土において、過去の記憶が回復し、復讐劇の幕が開くことになる。

ここまで見てきたように、土と水には象徴的な意味を込められているのだが、土と水によって育まれるのが植物である。『忘れられた巨人』においては、植物にも象徴的な意味が込められており、植物が和解の象徴となりうるかどうかが焦点となっている。先ほど引用したように、トラウマ的過去を埋蔵した土の表面は、緑の草木で覆い隠されているという場面があった。言い換えると、この草木は、真実を隠すまやかしに過ぎないのか、あるいは融和を意味するのかという問題が見られる。クエリグ殺しの使命を帯びたウィスタンが、密かにクエリグの守護者としての役目を果たしてきたガウェインと対決する場面で、ガウェインは次のように述べる。

> "You ask it well, Master Wistan, and I know my god looks uneasily on our deeds of that day. Yet it's long past and the bones lie sheltered beneath a pleasant

> green carpet. The young know nothing of them. I beg you leave this place, and let Querig do her work a while longer. Another season or two, that's the most she'll last. Yet even that may be long enough for old wounds to heal for ever, and an eternal peace to hold among us. Look how she clings to life, sir! Be merciful and leave this place. Leave this country to rest in forgetfulness" (311).

ここでガウェインが主張するのは、悲惨な過去であっても、長年の忘却を経て癒すことができるということだが、そこでガウェインが用いるのが植物の比喩である。憎しみの種が埋まっている大地を"a pleasant green carpet"が覆い隠すことで、後の世代は憎しみを忘れて育ち、長い年月をかけ、最終的に和解に至るという道筋をガウェインは思い描く。言い換えると、植物は、土が象徴するトラウマ的過去と水が象徴する忘却の相互作用によって生じるものであり、最終的な融和へと導くとされていると言える。しかし、そのような主張に対して、ウィスタンは真っ向から反論する。"How can old wounds heal while maggots linger so richly?"（311）という疑問が示すように、草木で表面を覆い隠そうとも、土の中でウジ虫が遺体を餌に繁殖するように、憎しみの源は消えることなく、生き続けていると反論するのである。

このように、ガウェインは植物を和解への希望ととらえる一方、ウィスタンは不都合な過去を覆い隠す表面的な偽装としてとらえている。そのため、この小説における植物の描かれ方も注目に値する。植物に注目してこの小説を読むと、植物の緑はしばしば癒しの象徴として描かれていることに気付く。まず、旅するアクセルとベアトリス夫婦が最終的に目指すのは、船頭のみが連れていくことができる不思議な性質の島である。この島の物語上の重要性は先述した通りだが、その描写で強調される地勢的な特徴は、緑の豊かさである。

> Good lady, the island this old woman speaks of is no ordinary one. We boatmen have ferried many there over the years, and by now there will be hundreds inhabiting its fields and woods. But it's a place of strange qualities, and one who arrives there will walk among its greenery and trees in solitude, never seeing another soul. Occasionally on a moonlit night or when a storm's ready to break, he may sense the presence of his fellow inhabitants. But most days, for each traveller, it's as though he's the island's only resident (42-43).

ここで船頭がベアトリスに説明するのは、他の住人の存在を感じることはあっても、その姿を見ることができないという特殊性であるが、島の物理的な特徴としては、木々が豊かであるということである。さらに、この植物の強調は別の個所においても見られ、最終章においてもベアトリスは、"There's a tale I once heard, perhaps as a small child. Of an island full of gentle woods and streams, yet also a place of strange qualities."（334）と述べており、その不思議な性質だけではなく、緑豊かであるということが並列されている。この島こそが、夫婦の旅の目的地であり、その憧れを抱く場所が、緑豊かな場所であるという点は重視するべきであろう。

また、衰弱したクエリグに関しても、植物は一種の癒しの源であったとされる。クエリグの巣において、アクセルの目を引くものが、巣穴にぽつんと立つサンザシである。干上がった池のような場所で、一か所のみに茂る植物を見たアクセルは、クエリグがそれに安らぎを見出していたのではないかと考える。

> But as he continued to gaze down at the creature, the idea came to him that the hawthorn bush — the only other thing alive in the pit — had become a source of great comfort to her, and that even now, in her mind's eye, she was reaching for it. Axl realised the idea was fanciful, yet the more he watched, the more credible it seemed. For how was it a solitary bush was growing in a place like this? Could it not be that Merlin himself had allowed it to grow here, so that the dragon would have a companion? (320)

馬鹿げていると一度は退けるものの、アクセルには、弱り切ったクエリグが植物に癒されたのではないかという仮説は、考えれば考えるほど真実に感じられる。そして、その繁みは、マーリンによってクエリグのために置かれているのではないかと考える。この仮説が真実であろうがなかろうが、植物の存在が癒しの象徴とされている点は重要である。

この場面でさらに注目すべきなのは、その木がサンザシ（hawthorn）であるという点である。アーサー王伝説におけるサンザシと言えば、グラストンベリーにおけるアリマタヤのヨセフの聖なるサンザシの逸話が思い浮かぶだろう。グラストンベリーは、致命傷を負ったアーサー王が船で運ばれた伝説の島アヴァロンであるという説がある一方、アリマタヤのヨセフがキリストの血を受けた聖杯をもってブリテン島までやってきて、彼が埋めた杖からサンザシが生えてきたという伝承がある。そのため、グラストンベリーは、ブリトン人の王というケルト的な要素と、キリスト教伝来にまつわる聖地としての側面が混ざり合った土地である。アーサー王伝説はブリトン人の王の物語であるが、長い伝承の歴史を経て、変容していった。そして、キリスト教的なモチーフとも融

合しながら、イギリスを代表するロマンスとなった。

この点を考えると、この小説においてイングリッシュネスへの言及がたびたび見られることが、より大きな意味を持ってくるだろう。なぜなら、この小説におけるイングリッシュネスは、カントリーハウスからみられる風景など、英国の緑の豊かさと結び付けられているからである。先ほど引用したように、小説の冒頭において、イシグロは、英国が英国となる前の時代における、荒涼たる風景を描いた。当時のブリテン島の不毛な様相を、“desolate”、“craggy”、“bleak”という言葉を用いて強調する一方、イングランドの象徴となる緑豊かな自然は、将来的に誕生するものとして言及された。トラウマ的過去を象徴する土と、忘却を象徴する水から、融和への希望として生じるものが植物であるならば、この風景描写は非常に重要な意味を持つだろう。というのも、予言的に言及される緑豊かなイングリッシュネスそのものが、将来的な和解の象徴となっているからである。たしかに、この小説はサクソン人によるブリトン人への復讐劇の開幕によって終わるが、その先にはイングリッシュネスの誕生があることも示唆されているのである。このように考えると、『忘れられた巨人』は忘却の功罪について、物語世界の象徴的な表現においても、忘却による融和の可能性に、より大きな力点が置かれていると言えるのではないだろうか。

5．結論

『忘れられた巨人』においては、忘却することの是非が様々な形で問われている。この問いには絶対的な正解は存在しえず、イシグロは過去を忘れて前を向いて進む忘却術の必要性を認識しながらも、それを全面的に肯定しているわけではない。忘却によって不都合なことから目をそらす態度は、正義という観点からは問題があることも理解している。忘却には功罪があり、その問題の重要性と普遍性を表現するため、『忘れられた巨人』では、個人のレベルと民族のレベルにおいて、忘れること／思い出すことに伴うジレンマを描いた。しかし、『忘れられた巨人』の舞台設定を見てみると、ジレンマを感じながらも、忘却による和解により重点が置かれていることがわかる。この小説では、ファンタジー的な設定ではあるが、イシグロはあえてブリテン島を舞台した。そして、その中に緑豊かな自然やカントリーハウスなど、イングリッシュネスを体現するものを忍び込ませた。さらに、土、水、植物という小説世界を構成する要素に象徴的な意味を与え、憎しみを宿す土と忘却を象徴する水から生じる植物を和解の象徴として描いた。このように、『忘れられた巨人』の舞台設定の意味を考察すると、虐殺のトラウマを抱えた不毛なブリテン島が、後に緑豊かな土地となることを示唆することで、イシグロは忘却による和解への希望を込めていると言えるのではないだろうか。

引用文献

Borowska-Szerszun, Sylwia. “The Giants beneath: Cultural Memory and Literature in Kazuo Ishiguro’s The Buried Giant.” *Crossroads. A Journal of English Studies*, no. 15(4), 2016, pp. 30-41.

Derrida, Jacques. *On Cosmopolitanism and Forgiveness*. Translated by Mark Dooley and Michael Hughes, Routledge, 2010.

Groes, Sebastian, and Barry Lewis, editors. *Kazuo Ishiguro: New Critical Visions of the Novels*. Palgrave Macmillan, 2011.

Hodson, Richard J.. “The Ogres and the Critics: Kazuo Ishiguro’s *The Buried Giant* and the battle line of fantasy.” 西南学院大学学術研究所『英語英文学論集』56（2, 3）2016年３月

Ishiguro, Kazuo. *My Twentieth Century Evening and Other Small Breakthroughs: The Nobel Lecture Delivered in Stockholm on 7 December 2017*. Faber & Faber, 2017.

―――. *The Buried Giant*. Faber & Faber, 2015.

Kakutani, Michiko. “Review: In ’The Buried Giant,’ Ishiguro Revisits Memory and Denial.” *The New York Times*, The New York Times, 14 June 2018, www.nytimes.com／2015／02／24／books／review-in-the-buried-giant-ishiguro-revisits-memory-and-denial.html.

“Kazuo Ishiguro: The Buried Giant.” *The Agenda with Steve Paikin*, TV Ontario, 22 July 2015, www.youtube.com/watch?v=QizILvkdgnk.

Lezard, Nicholas. “The Buried Giant by Kazuo Ishiguro Review - Here Be Dragons.” *The Guardian*, Guardian News and Media, 27 Jan. 2016, www.theguardian.com/books/2016/jan/27/buried-giant-kazuo-ishiguro-review-nicholas-lezard.

Moore, Michael Scott, et al. “‘I Remain Fascinated by Memory’: Spiegel Interview with Kazuo Ishiguro.” *Spiegel Online*, 5 Oct. 2005, www.spiegel.de/international／spiegel-interview-with-kazuo-ishiguro-i-remain-fascinated-by-memory-a-378173.html.

Ricœur, Paul. *Memory, History, Forgetting*. Translated by Kathleen Blamey and David Pellauer, Univ. of Chicago Press, 2010.

Sanai, Leyla. “The Buried Giant by Kazuo Ishiguro Review: This Novel Is Classic.” *The Independent*, Independent Digital News and Media, 1 Mar. 2015, www.

independent.co.uk/arts-entertainment/books/reviews / the-buried-giant-by-kazuo-ishiguro-book-review-dont-fall-for-the-fantasy-this-novel-is-classic-10076373.html.

Scholes, Lucy. "Kazuo Ishiguro's The Buried Giant." *BBC News*, BBC, 3 Mar. 2015, www.bbc.com/culture/story/20150303-enter-the-dragons.

Teo, Yugin. *Kazuo Ishiguro and Memory*. Palgrave Macmillan, 2014.

Whitehead, Anne. *Memory*. Routledge, 2010.

Wood, Gaby. "Kazuo Ishiguro: 'There Is a Slightly Chilly Aspect to Writing Fiction'." *The Telegraph*, Telegraph Media Group, 5 Oct. 2017, www.telegraph.co.uk / books / authors / kazuo-ishiguro-countries-have-got-big-things-buried/.

石黒千賀子. "「キーパーソンに聞く　今の日本なら「忘れられた巨人」と向き合える：10年ぶりの新作に込めたカズオ・イシグロの思い」." 日経ビジネス ONLINE, 26 June 2015, business.nikkeibp.co.jp/atcl/interview/15/238739/062500009/.

伊藤　盡「生き埋めにされた伝説」『ユリイカ』12月号、2017年、203-213

柴田元幸、中島京子「幸福な記憶から外に出ること――カズオ・イシグロを読む」『ユリイカ』12月号、2017年、26-40

『カズオ・イシグロ　文学白熱教室』NHK、東京テレ、2015年 8 月16日、Television.

武富利亜「イシグロの内なる世界」『ユリイカ』12月号、2017年、60-66

ニーチェ、フリードリヒ　小倉志祥訳『反時代的考察』ちくま文庫、1993年

富士川義之「英国と日本の狭間で」『ユリイカ』12月号、2017年、41-45